

僕は兎にも角にももう全くもって太陽ってやつが大嫌いだ。

本当にみんなお日様サイコーだなんてあいつに騙されているだけなんだ。だって考えてみればいい。

あんなに誰よりも目立つように空の真ん中で居座っているくせに、

まともに視線を向ければ途端に瞳を焼かれてしまう。

太陽がなくなっちゃ生きていけないって言うけれど、

紫外線なんて破壊光線を問答無用でまき散らしている奴なんてSFの敵にもそういない。

ああ、ふざけんな。

そんなの自分から熱烈すぎる視線を向けてくるくせに、

目を合わせた途端に因縁を付けてくる駅の不良と一緒にやないか。

もしくは極端に丈が短いスカートを穿いて胸元の開いたブラウスを着て、

眼鏡だけやたらと知的なくせにちょっと見惚れたらいやらしいなんて言う女でもいい。

ああ、止めてくれ。

なんて自分勝手に自己中心的なんだろう。

あいつはきつと最初っから世界は自分を中心に回ってるって、

悔しいけれど知っていたんだ。

そして隠れて笑うなんて慎みも持たずに、

どうせお前ら俺が必要なんだろうって、

春でも夏でも秋でも冬でも自信満々にでんっと姿を現してきたんだ。

ああ、分かってる。

確かにあいつはこの世界に必要なだ。

そしてまた僕にもあいつは必要だ。

だけどそんな事実があるから余計に僕はあいつが嫌いなんだ。

だからせめてもの抵抗として、

僕はいつもあいつが眠りに就いてから仕事に就く。

太陽のおこぼれに預かるような役割だとしても、

素敵な告白を控えている男女にとってはお互に僕の方こそ価値ある時もあるはずから。

でもでもでもそんな男女もやっぱ結局はとも良く晴れた昼間なんかは、

真っ白いドレスとスーツなんて格好をしたがるからやっぱりふざけんな。

ああ、つまらない。

こっちはいつも裏の顔を見せないように気を遣って立ち回ってるのに、

あいつなんてどっちを向いても馬鹿みたいに真っ赤に燃えてるだけじゃないか。

それなのにそんな優しい僕よりも、

明るいやあなたが好きなのよなんてきつとみんな騙されているだけなのに。

ああ、ああ、ああ、ああ、羨ましい。

また朝が来る。

そしてあいつが現れて世界は今日も目覚められた事に感謝する。

僕はそれを尻目に見ながらさつさと引つ込めと追い立てられる。

ああもう本当にやっていられない。

僕は兎にも角にももう全くもって何よりも誰よりも太陽ってやつが大嫌いだ。